



朝のこない夜はない

山首 鈴木正修

無量の慈しみの心

7月8日の安倍元総理の突然の死は日本中に衝撃とともに深い悲しみをもたらしました。犯人は旧統一教会に対しても強い怨みを持つての犯行だったということですが、安倍元総理も旧統一教会への怨みが自分に向いてくるとは思いもよらなかったことと思います。

中国の古い歴史書に『戦国策』というものがあります。これは秦の始皇帝が中国を統一するまでの戦国時代のことをまとめた書物です。その中に「怨みは深淺を期せず、それ心を傷うに於いてす」という言葉があります。ささいな怨みでも、相手の心を傷つけければ、手ひどい報いを受けるということなのです。この言葉の典拠となった出来事を紹介し



ます。

戦国時代に、中山という小国がありました。ある時、王が国中の名士を招いて一席もうけました。その席に司馬子期という者がつらなっていました。どうした手違いか羊のスープが足りなくなり、末席に座っていた司馬子期のところまでスープが回ってこなかったのです。司馬子期は怒って帰ってしまい、そのまま中山を出て行き、隣の大国、楚に身を寄せました。そして、楚王をけしかけて中山を攻撃させたのです。あつという間に小国の中山は滅ぼされてしまい、中山王は命からがら国外へ逃げ出しました。その逃げた王を、長い戈を持って追いかけてくる屈強な二人の若者がいました。王は、刺客が来たかと思ひ、「何者だ」と声をかけると、思わぬ返事が返ってきました。若者は「数年前に王さまから一壺の食べ物を与えられて、餓死を免れた者がおりました。私どもは、その者の倅でこ



ざいます。父ちちは今際いまわの際きわに『中山君ちゅうざんくんに事ことあらば、命いのちに代え
てもこのご恩おんに報むくいよ』と言いい残のこしました。『今いまこそご恩おん
に報むくいる時ときだ』と思おもい、急いそぎ馳はせ参さんじた次第しだいでございます』
と言いいました。そこで、中山王ちゅうざんおうは深ふかく嘆息たんそくして「わずかな
施ほどこしでも相手あいてが困こまっている時ときには、その効果こうかはてきめんで
ある。ささいな怨うらみでも相手あいての心こころを傷きずつければ、手てひどい
報むくいを受けるものだ。私わたくしは一杯いっぱいのスーすープで国くにを失うしない、一壺いっこ
の食たべ物もので二人ふたりの勇ゆう者しやを得えた」と語かたったといひます。

私達わたくしたちもどこで怨うらみを買かっているかわかりません。だから
こそ、普段ふだんの言動げんどうに氣きをつけなくてはいけません。そして、
いつでも、どこでも、誰だれに対たいしても慈悲じひの心こころを持もたなくて
はいけません。それが巡めぐり巡めぐって自分自身じぶんじしんに返かえってくるの
です。

慈悲じひは仏教ぶつぎょうを象徴しょうていする言葉ことばです。古い經典きうてん『スッタニパ



ータ』に「あたかも、母^はが己^{おの}が独^{ひと}り子を命^{いのち}を賭^かけても護^{まも}る
ように、そのように一切^{いっさい}の生^いきとし生^いけるもの^{もの}に對^{たい}して、
無^む量の慈^{いつく}しみの心^{こころ}を起^{おこ}すべし」とあります。このような
心^{こころ}こそが仏^{ほとけ}さまの心^{こころ}です。

臨^{りん}濟^{ざい}宗^{しゅう}円^{えん}覺^{かく}寺^じ派^はの横^{よこ}田^た南^{なん}嶺^{れい}管^{かん}長^{ちやう}が、『スツタニパート』
のこの言^{こと}葉^はをあるご法^{ほう}話^わで紹^{しょう}介^{かい}された時^{とき}、同^{どう}年^{ねん}配^{ばい}の女^{じょ}性^{せい}が
「管^{かん}長^{ちやう}は子^こどもを育^{そだ}てたこと^{こと}がな^ないから、母^は親^{おや}が子^こどもを
育^{そだ}てることがど^どれだ^だけ大^{たい}変^{へん}なこ^こと^とか^かわ^わか^かつ^つてい^いない。自^じ分^{ぶん}
の子^こども一^{ひと}人^りに對^{たい}して^も慈^{いつく}しみの心^{こころ}を起^{おこ}すのは大^{たい}変^{へん}なこ
とな^なのです。だ^だから、そ^それをあら^{あら}ゆる人^{ひと}に向^むけるな^なんて無^む
理^りです」と言^いつてきた^きた^たそうです。そ^それに對^{たい}して横^{よこ}田^た管^{かん}長^{ちやう}は
「確^{たし}かに私^{わたし}は子^こどもを育^{そだ}てたこ^こと^とはあ^ありま^ません。け^けれど^どね、
日^に本^{ほん}人^{じん}は昔^{むかし}からど^どんな^{んな}人^{ひと}に對^{たい}して^も、我^わが子^こを思^{おも}うよう^{よう}に
慈^{いつく}し^み、助^{たす}けて来^きた^たん^んです^すよ」と答^{こた}え^えられ、エ^エル^ルト^トウ^{ール}



ル号（ごう）の話（はなし）をされたそうです。

横田（よこた）管長（かんちやう）は和歌山（わかやま）県出身（けんしゆしん）です。エルトウールル号（ごう）は和歌山（わかやま）県沖（おき）で沈没（ちんぼつ）したトルコの船（ふね）です。

明治23年（めいじ ねん）、オスマントルコの軍艦（ぐんかん）エルトウールル号（ごう）が日本（ほん）にやって来（き）ました。親善使節団（しんぜんしせつだん）が明治天皇（めいじてんのう）に謁見（えつけん）するため（ため）でした。その帰路（きろ）、台風（たいふう）に遭（あ）つて、エルトウールル号（ごう）は和歌山（わかやま）県串本町（くしもんちやう）沖の大島（おおしま）の近くで座礁（ざせう）して沈没（ちんぼつ）してしまいました。乗組員（のりくみいん）609人（にん）のうち助（たす）かったのが、69人（にん）でした。大島（おおしま）の村民（そんみんたち）達が荒（あ）れる海（うみ）に飛び込み命（いのち）がけで助（たす）けたのです。そして、自分達（じぶんたち）の着物（きもの）や食べ物（たもの）をすべて与（あた）えました。非常（ひじょう）食（しょく）も出（だ）しました。中（なか）には「この先（さき）どうしよう」と言（い）った村人（むらひと）もいました。村長（そんちやう）が「おてんとうさまがどうにかしてくださる。心配（しんぱい）するな」と言（い）ったそうです。この後（あと）、日本（ほん）中（ちゆう）から義援金（ぎえんきん）が集（あつ）まり、遺族（いぞく）に送（おく）られたのです。数力月（すうりきげつ）後（ご）には明治天皇（めいじてんのう）の計（はか）らいで、最新鋭（さいしんえい）の軍艦（ぐんかん）で生存者達（せいぞんしゃたち）はイス



タンブールに送り届けられました。

この話から百年後にイラン・イラク戦争が起きました。当時、日本人もたくさんイランに滞在していました。そして、ある日突然、当時のイラク大統領、サダム・フセインが、「今から48時間後に、イランの上空を飛ぶすべての飛行機を撃ち落とす」と宣言しました。命からがら外国人はみんな自国の特別機で脱出しました。しかし、日本人は逃げるのができませんでした。当時の日本政府は素早い対応ができず、救援機を出せなかったのです。その結果、215人の日本人がテヘランの空港で孤立してしまいました。残された日本人は、もう自分達は戦争に巻き込まれてしまう、と絶望の中にいました。その時にトルコ航空の飛行機が2機飛んできました。トルコの人が乗るのかと思っていたら、「日本人は全員乗ってくれ」と言うのです。その時助けられた日本人はなぜ助けられたのかわかりませんでした



た。無事^{ぶじ}に帰^{かえ}ってきて、ようやくわかりました。エルトゥール^{エルトゥール}号^{ごう}の恩返^{おんがえ}しだったのです。トルコ^{トルコ}の人達^{ひとたち}は小学生^{しょうがくせい}の頃^{ころ}からエルトゥール^{エルトゥール}号^{ごう}の話^{はなし}を聞^きいて知^しっているそうです。トルコ^{トルコ}のオザル首相^{しゅしょう}が「百年前^{ねんまえ}の恩^{おん}を返^{かえ}す時^{とき}は今^{いま}だ」と、日本人^{にほんじん}のために飛行機^{ひこうき}を2機^き飛ばしたのです。

こんな話^{はなし}もあります。その時^{とき}、オザル首相^{しゅしょう}が「まず日本人^{にほんじん}全員^{じんぜんいん}を乗^のせて、乗^のれなかったトルコ人^{トルコじん}は陸路^{りくろ}で帰^{かえ}ってくるように」という指示^{しじ}を出^だしました。それでもトルコ人^{トルコじん}から文句^{もんく}は出^でなかったそうです。飛行機^{ひこうき}はサダム・フセインの言^いうタイムリミットまでギリギリでした。後^{のち}にトルコ人^{トルコじん}のパイロットがインタビューに「怖^{こわ}くなかったですか？」と聞^きかれ、「それは怖^{こわ}かったですよ。でも、日本人^{にほんじん}のためなら何度^{なんど}でも飛^とびますよ」と答^{こた}えていました。胸^{むね}を打^うたれる話^{はなし}です。エルトゥール^{エルトゥール}号^{ごう}の話^{はなし}は2015年^{ねん}に『海難^{かいなん}1890』という映画^{えいが}になりました。



経験^{けいけん}の有無^{うむ}にかかわらず、人の心^{こころ}を察^{さつ}して行動^{こうどう}するのが慈悲^{じひ}の行^{ぎやう}いす。

近代看護婦制度^{きんだいかんごふせいど}を確立^{かくりつ}したフローレンス・ナイチンゲール^{せんそう}はクリミア戦争^{じやうぐん}に従軍^{じやうぐん}して「ランプを持^もった天使^{てんし}」と呼ば^よれました。ナイチンゲール^{ないちんげーる}はその後^ご、看護学校^{かんごがっこう}を作り^{つく}、若い看護婦さん達^{わかかんごふたち}にまづ言^いったそうです。

「看護婦^{かんごふ}になったら、あなた達^{あなたたち}が経験^{けいけん}したことの無い悲^{かな}しみや苦^{くる}しみを理解^{りかい}し共感^{きやうかん}しなければいけません。それができないなら看護婦^{かんごふ}になる資格^{しかく}はありません」

ナイチンゲール^{ないちんげーる}も慈悲^{じひ}の大切^{たいせつ}さを言^いっているのです。

内田美智子^{うちだみちこ}さんという助産師^{じよさんし}の方がおられます。内田^{うちだ}さんは3000人以上^{にんいじょう}の赤ちゃん^{あか}の出産^{しゅっさん}に立ち会^あっている方^{かた}です。その内田^{うちだ}さんの本^{ほん}にこんな話^{はなし}があります。

「お産^{さん}というのは、『おめでた』ばかりではないんです。



死産しげんもあります。ある妊婦にんぶさんの話はなしですが、その妊婦にんぶさんは10カ月目げつめに入はいって胎動たいどうがしなくなりました。診察しんさつの結果けっか、胎児たいじが亡なくなっていることがわかりました。でも産うまなければなりません。普通ふつう、お産さんのとき、私は『頑張がんばってね、もうすぐ元気げんきな赤ちゃんあかに会あえるからね』と励はげまします。しかし、死産しげんの時ときにはかける言葉ことばがありません。分娩室ぶんべんしつでは泣なかない赤ちゃんあかの代わりかに、母親ははおやの泣なき声こえが響ひびき渡るわたんです」

そのお母さんかあが分娩ぶんべんの後あとに「一晩ばんだけでもこの子こを抱だいて寝ねたいです。いいですか」と尋ねたずねました。内田うちださんは「いいですよ」と言いって、真夜中まよなかにその病室びやうしつを見回みまわりに行いきました。お母さんかあはベッドに座すわってその赤ちゃんあかを抱だいていました。「大丈夫だいじょうぶですか」と声こえをかけると、お母さんかあは「今いま、お乳ちちをあけていたんですよ」と答こたえました。母親ははおやは乳首ちくびからじみ出でてくる乳ちちを指ゆびにつけて、子こどもの口くちも



とに移うつしていました。その姿すがたを見た内田うちださんは、そっと近ちかづいて肩かたにやさしく手てを置おきました。内田うちださんは言いわれま
す。

「おっばいをどんなにその子こに飲のませたかったことか。
泣なかない子こでもその子この母親ははでありたい」と思おもうのが、
母親ははなんです」

ナイチンゲールは内田うちださんのような看護婦かんごふになることを
求もとめたのだと思おもいます。

慈母じぼ観音かんのんは赤あかちゃんを抱だいて優やさしい顔かおをしてられます。
なぜ慈母じぼ観音かんのんがこのようなお姿すがたをしてられるかという
昔むかしは文字もじが読よめない人ひとも大勢おおぜいいました。そういう人達ひとたちに
「仏ほとけさまの慈悲じひの心こころはこういうものだ」とわかりやすく教おし
えるために、観音かんのんさまの姿すがたをお像ぞうにしたのです。



観音さまは仏教を代表する菩薩であり、古くから信仰対象として崇められてきました。各地のお寺に行きますと、宗派を問わず、水子観音、千手観音、馬頭観音、聖観音といった観音さまがお祀りされています。また観音霊場巡りというものも民間信仰としてとても盛んです。観音さまのお慈悲にすがろうとする人々の心が観音信仰を盛んにしてきたのだと思います。

最近こんなお話を知りました。ある禅宗のお寺の檀家の奥さんが、住職のところへ沈んだ様子でやって来ました。聞くと、この奥さんのご主人がずっと重い病気を患っていて、この度退院したのですが、治る見込みがないという理由から退院を促されたということだったのです。奥さんはずっと元気がなく、暗い表情でうつむいていました。そこで住職が『延命十句観音経』というお経を書いて「これを毎日唱えなさい。きっと良いことがありますよ」と言って



渡わたしました。これは非常に短みじかいお経きやうです。

観世音かんぜおん 南無なむ仏ぶつ 与よ仏ぶつ有う因いん 与よ仏ぶつ有う縁えん 仏ぶつ法ぽう僧そう縁えん 常樂我淨じやうらくがじやう

朝念ちやうねん觀世音かんぜおん 暮念ぼねん觀世音かんぜおん 念念ねんねん從じゆう心しん起き 念念ねんねん不ふ離り心しん

(觀世音菩薩かんぜおんぼさつよ、仏ほとけに歸依きえします。我々われわれは仏ほとけと因縁いんねんでつな

がっています。三宝ぼうの縁えんによつて、常樂我淨じやうらくがじやうを悟さとります。

朝あさにも夕ゆふべにも觀世音菩薩かんぜおんぼさつを念ねんじます。觀世音菩薩かんぜおんぼさつを念ねんじ

る想おもいは我々われわれの心こころより起おこり、また觀世音菩薩かんぜおんぼさつを念ねんじ続つづけ

て心こころを離はなれません)

江戸時代えどじだい、白隱はくいん禪師ぜんじが『延命十句觀音經靈驗記えんめいじゅうくわんのんきやうれいげんき』の中なかで

次つぎのように記しるしています。

「此この經きやうの靈驗れいげん、老僧らうそうが身みの上うへに於おいても心こころも言葉ことばも及およばざ

る有ありがたき事ことども数多あまたたびこれあり」



それからご夫婦は毎日このお経を唱えられ、しばらくして、ご夫婦でお寺にお参りされ、その時は表情がとても晴れ晴れとしていたそうです。住職もそんな様子に安堵していました。しかし、それから半年ほどがたつてご主人は亡くなつてしまいました。住職は二人で一生懸命に『延命十句観音経』を唱えられていたが、奇跡は起きなかったかと申し訳ない気持ちになりました。

ところが、お葬儀の後、奥さんがお寺に来られ、住職に感謝を述べられたそうです。

「亡くなる数日前に主人がこういうことを言いました。

『お寺のご住職に教わったお経を唱えていけば、観音さまがどこからか現れて、きっと私を救ってくださるんだと思つて一生懸命唱えていたけど、観音さまは現れなかった。でも気がついたんだよ。長い間ずっとそばにいて、私の世話をしてくれたお前が観音さまだったんだなあ』。そう言



って、ベッドの中で手を合わせてくれました。

長年、主人の看病と介護をしてきて、時にはこの人のために何でこんな目に遭わなければならないのかと思う日もありました。けれど、ベッドの中で手を合わせる主人を見て、今までのそういう思いも疲れも全部取れていきました。私にとっては、主人が観音さまだったと気づきました。本当にありがたかったです。お互いに拝みあって最期を迎えることができたのは『延命十句観音経』のお陰です。夫婦がお互いに手を合わせられるような心になることが『観音経』の本当の功德であり靈験であろうと思います。また、人がお互いを慈しみ合う心を持つことこそが仏さまの根本精神です。

